

機関番号：37503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520379

研究課題名（和文） 近代カンボジアにおける国語の成立に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Establishment of the National Language in Modern Cambodia

研究代表者

笹川 秀夫 (SASAGAWA HIDEO)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：10435175

研究成果の概要（和文）：本研究では、植民地期以降のカンボジア仏教の動向と、仏教界の知識人が言語政策にどのように関与したかという2点を明らかにすることで、カンボジアにおける国語の成立を解明することを目指してきた。仏教界の動向については、サンガ法に相当する政令の存在などに関して新知見が得られた。言語政策については、近代語彙の造語に大きな役割を果たした文化委員会の活動が、タイの影響を極力排除し、近代言語としてのクメール語を創造する試みであったと結論づけられる。

研究成果の概要（英文）：In order to elucidate the establishment of the national language in modern Cambodia, the purpose of this research project is twofold: the vicissitude of Cambodian Buddhism since the colonial period and the language policies in which Buddhist intellectuals played significant roles. As for the former research topic, this research clarified the existence of several decrees equivalent to laws to regulate the Sangha. In the realm of the language policies, it can be concluded that the modern vocabulary coined by the Cultural Committee tried to exclude Thai influence and create the modern Khmer language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：社会言語学、カンボジア研究、地域研究

1. 研究開始当初の背景

本研究が課題としてきた近代カンボジアにおける国語の成立というテーマを検討するには、(1)カンボジア仏教の展開、(2)改革派僧侶を中心とした言語政策への関与という2点を扱う必要がある。以下、これら2点について、本研究以前の研究状況を記す。

(1) カンボジア仏教の展開

植民地期以降のカンボジア仏教については、近年、英語圏で研究の進展が見られる。植民地期前半については、アン・ハンセンの著作が、プノンペンのカンボジア国立公文書館に残る資料をもとに議論している。植民地期後半については、ペニー・エドワーズの著作が扱っているものの、主にフランスに残る

資料を用いている。1997 年末にカンボジア国立公文書館が研究者に公開されて以降、フランスに残る資料よりも同公文書館の所蔵資料にもとづいてこそ、カンボジア史の詳細が理解できることが知られるようになった。そのため、植民地期後半についても、同公文書館の資料にもとづいた研究が俟たれていた。

(2) 言語政策

カンボジアにおける国語の成立を検討するには、植民地期、さらには独立後・内戦前の言語政策について調査する必要がある。上記のベニー・エドワーズの著作は、1938 年、改革派の僧侶を代表するチュオン・ナートの中心となって刊行された『クメール語辞典』をもって、国語の成立と見なしている。この辞書の刊行がカンボジアにおける正書法の確立といえ、辞書の重要性については首肯しうるが、国語の成立を論じるには、近代語彙の造語、文法書の刊行、教育を通じた国語の普及など、他のテーマも議論する必要がある。

一方、新造語についても若干の言及を行なっている著作として、クン・ソックによる書籍や論文があげられる。しかし、クン・ソックの著作は、1960 年代～70 年代前半に言語政策にかかわった人物の手記を主要な資料としており、公文書館に残る資料などでは知りえない情報も記されているものの、年号の誤りや重要な出来事に関する記述が粗いなどの問題点も散見される。

2. 研究の目的

上記のような研究状況から、カンボジア国立公文書館に残る資料にもとづき、植民地期以降のカンボジア仏教に対する政策、そうした政策に呼応した仏教改革運動、改革運動を主導した僧侶が中心的な役割を果たした言語政策などが検討される必要があり、本研究が立案された。

(1) カンボジア仏教の展開

植民地期以降のカンボジア仏教の展開を知るには、植民地政庁およびカンボジア王国政府がどのような政令を公布し、どのようにサンガ（僧団）に働きかけたかを知る必要がある。そして、政令が公布された年月日、政令の内容、公布に至る経緯などを調査しなければならない。また、政令によって制度化された寺院内の各種学校（僧侶向けのパーリ語学校と在俗の子弟を対象とした寺院学校の両者を含む）がどのようなものであったか、いつごろ、どのように地方に波及したかも検討されなければならない。

(2) 言語政策

上述の『クメール語辞典』が刊行されるまでの経緯については、この辞書の序文、およ

びジョルジュ・セデスが『フランス極東学院紀要』に寄稿した書評に詳しい。序文と書評から、辞書編纂委員会の成立時期、委員会内での正書法をめぐる対立、チュオン・ナートの参加と主導権奪取などについて知ることができる。しかし、当然ながらこれら序文と書評の記述も、一次資料にもとづいて当否を確認する必要がある。

新造語については、1940 年代末から 1950 年代初頭および 1960 年代前半の『カンブチエ・ソリヤー』誌に、文化委員会による近代語彙の造語一覧表が掲載されている。クメール語の近代語彙には、タイ語と共通するもの、共通しないものが見られ、これらの新造語の語源を確認し、タイ語からの影響の有無を検討することも、国語の成立というテーマを論じる際の重要な研究目的となる。

正書法、語彙、文法など、言語政策が一般に流布するにあたって、教育が果たした役割は看過できない。先行研究では、植民地期から内戦前のカンボジアの教育に関して、エリート養成を目的としたフランス語による公立学校のみを重視するか、庶民への初等教育の普及を目的としたクメール語による寺院学校のみを重視するか、いずれかに偏る傾向がある。そのため、1920 年代以降のカンボジアでは、公立学校と寺院学校という複線型の教育制度が確立したことを明確にし、さらにその教育内容を検討することも、国語の成立というテーマに関連する研究目的となる。

3. 研究の方法

上記の研究目的のため、本研究ではカンボジア国立公文書館が所蔵する資料から主たるデータを収集し、必要に応じてプノンペンのカンボジア国立図書館などでも調査を実施した。

カンボジア国立公文書館では、まず仏教および言語政策に関する理事長官文書を閲覧した。これら理事長官文書から、政令が公布されるまでの経緯など、植民地政庁やカンボジア王国政府でのやり取りの詳細が理解できる。ただし、資料が植民地期に限られること、すべての出来事に関して資料が残っているとは限らないことなど、いくつかの限界も存在する。

そこで本研究では、同公文書館と国立図書館が収蔵するフランス語版およびクメール語版の官報を精査することを試みた。フランス語版の官報は 1902 年から植民地政庁が刊行し、1945 年からはカンボジア王国政府が引き継いでいる。また、クメール語版は、当初フランス語版の要約ではあるが、1911 年から刊行され、徐々にフランス語版と同内容になっていく。これら官報の内容を網羅的に調査することで、仏教関係の政令の公布時期と内容、文化委員会のメンバーの変遷などを知り

えた。

また、平成 22 年度～23 年度には、笹川が代表者となって、京都大学東南アジア研究所の共同利用・共同研究拠点に「国家形成と地域社会－カンボジア官報を利用した総合的研究」というテーマで採択された。この共同研究資金を用いて、カンボジア国立公文書館でマスターコピーが作成済みであった 1904～1915 年および 1945～1973 年のフランス語版官報のマイクロフィルムを購入した。このマイクロフィルムは、京都大学東南アジア研究所図書室に収められ、現在では日本国内でもフランス語版官報の閲覧が可能になっている。

4. 研究成果

植民地期以降の仏教政策と改革運動については、ワーキングペーパーという形ではあるが、論文として刊行済みである。この論文では、まずタイ仏教との関係、とくにトアンマユット派の成立を論じた。先行研究には、タイ仏教のタンマユット派がカンボジアに伝播し、トアンマユット派として成立した時期を 1864 年とするものが多いが、資料の検討などから 1854 年が正しいことを明らかにした。さらに、カンボジアのサンガ法に相当する政令を検討した。先行研究では、1943 年 2 月 9 日付の王令 12 号がカンボジア初のサンガ法であると見なす傾向にあったが、それに先立って、1919 年 7 月 25 日付の王令 46 号など、サンガ法に相当する重要な政令が存在することを指摘した。また、トアンマユットと比較して多数派であるモハーニカーイ派内部に、チュオン・ナートを代表とする改革派が出現したこと、改革派の出現が仏教界に対立を惹起したこと、改革派こそが独立後のカンボジア仏教を代表する存在と見なされるようになったことなどを論じた。

この論文は PDF で公開されていることもあり、すでに何人かのカンボジア研究者によって引用・言及されている。サンガ法に相当する政令の存在、公布時期、内容については、近年の英語圏でのカンボジア仏教研究でも全く知られていない。今後はこうした新知見を英語論文としてまとめ、学術雑誌に投稿していきたい。

植民地期以降の教育については、すでに本研究の開始以前、拙著『アンコールの近代－植民地カンボジアにおける文化と政治』（中央公論新社、2006 年）で、複線型の教育制度の存在、そうした制度に対応したフランス語およびクメール語版教育雑誌の刊行状況、それら教育雑誌に見られる歴史教育の内容などを発表している。本研究期間中、これらの内容を英語論文にまとめ、カンボジアにあるフランス系の研究機関 Center for Khmer Studies が刊行している査読誌 Siksacakr に

投稿した。査読は早くに通過したものの、この雑誌はクメール語の全訳を載せる方針であることなどから、刊行が遅れている。しかし、2011 年度内には刊行される予定との連絡を受けている。

正書法の確立、辞書の刊行、近代語彙の造語については、2010 年度に口頭発表を行なった。上述の通り官報を精査することで、文化委員会のメンバーの変遷を明らかにしたほか、文化委員会による造語を検討し、20 世紀前半までのクメール語にはタイで造語された近代語彙が多数流入していたのに対して、1940 年代後半からの文化委員会の活動によって、タイ語とは異なる近代語彙が多数造語されたことが明らかになった。京都大学東南アジア研究所が刊行する査読誌『東南アジア研究』が英文によるカンボジア特集を企画しており、この口頭発表の内容を寄稿するよう依頼を受けた。2011 年 12 月が投稿の締め切りとなっており、現在執筆を始めたところである。

文法書の検討、クメール語を母語としない少数民族に対するクメール語教育など、国語の成立に関しては検討すべき課題が多い。文法書や教育雑誌に見られるクメール語文法については、本研究の期間に資料の収集をほぼ完了した。また、少数民族に対する教育については、国勢調査の結果なども含め、新たな文献資料収集を開始したところである。これらのテーマについても、資料の分析が済み次第、口頭発表および論文執筆という形で成果を発表していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ① SASAGAWA Hideo, Historical Education and the Glorification of Angkor in Colonial Cambodia, Siksacakr, 査読あり, 11, 2011, ページ未定
- ② 笹川秀夫、カンボジア－内戦の傷跡、復興の明暗、清水一史ほか編、東南アジア現代政治入門、査読なし、ミネルヴァ書房、2011、pp. 167-189
- ③ 笹川秀夫、植民地期のカンボジアにおける対仏教政策と仏教界の反応、京都大学グローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」ワーキングペーパー Area Studies No. 85 (G-COE Series, No. 83)、査読なし、2009、計 27 頁
- ④ 笹川秀夫、「伝統」としてのカンボジアの宮廷舞踊と影絵芝居、高松晃子編『日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 平成 20 年度研究報告－

伝統から創造へ3』日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション」「芸術文化における伝統的なもの」グループ刊、査読なし、2009、pp. 7-19

- ⑤ 笹川秀夫、東南アジア学会、近年の活動、アジア経済、査読なし、49(10)、2008、pp. 57-69
- ⑥ 笹川秀夫、新刊紹介—北川香子著『カンボジア史再考』連合出版、史学雑誌、査読なし、116(6)、2007、pp. 87-88

〔学会発表〕(計12件)

- ① 笹川秀夫、20世紀カンボジアにおける言語政策—正書法と新造語をめぐる議論を中心として、京都大学東南アジア研究所「東南アジア研究の国際共同研究拠点」共同研究「国家形成と地域社会—カンボジア官報を利用した総合的研究」2010年度第1回研究会、於上智大学、2010年11月13日
- ② 笹川秀夫、官報にみるカンボジア仏教の展開、日本カンボジア研究会第4回研究会、於京都大学、2010年7月4日
- ③ 笹川秀夫、近現代のカンボジアにおける国民文化の形成過程：改革派僧侶にとっての仏教、言語、文化遺産、同志社植民地研究会主催「ヨーロッパと日本における植民地主義と近代性」第32回研究会、於同志社大学、2009年10月24日
- ④ 笹川秀夫、世界遺産と文化ナショナリズム、国際武力紛争—カンボジア=タイ間におけるプレア・ヴィヒア遺跡問題、日本国際文化学会第8回全国大会、於佐賀大学、2009年7月5日
- ⑤ 笹川秀夫、1920~1940年代のフランス語版官報にみるカンボジア仏教関連記事、京都大学地域研究統合情報センター共同研究ユニットⅡ「地域情報資源共有化プロジェクト—地域情報学の創出」「大陸部東南アジア仏教圏の文化実践の動態をめぐる時空間の位相」2008年度第3回研究会、於熊本大学、2009年3月13日
- ⑥ 笹川秀夫、東南アジア学会、近年の活動、東南アジア学会九州例会 (APU 東南アジア研究フォーラムとの共催)、於立命館アジア太平洋大学、2008年6月27日
- ⑦ 笹川秀夫、近代カンボジアにおける仏教改革運動と寺院壁画—文献資料と図像資料から、京都大学地域研究統合情報センター共同研究ユニットⅡ「地域情報資源共有化プロジェクト—地域情報学の創出」「大陸部東南アジア仏教圏の文化実践の動態をめぐる時空間の位相」2007年度第3回研究会、於金沢市内新右エ門秀峰閣、2008年2月2日

- ⑧ SASAGAWA Hideo, Hybridization and (Un)contested Histories of Khmer and Thai Cultures, Paper presented at 2007 Ritsumeikan Asia Pacific University Conference “Asian Cultures: Confluence and Divergence” jointly organized by RCAPS and Kyung Hee University, at Ritsumeikan Asia Pacific University, January 22, 2008
- ⑨ 笹川秀夫、「伝統」としてのカンボジアの宮廷舞踊と影絵芝居、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業、研究領域 V-1「伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション」第3グループ「伝統から創造へ」研究会、於聖徳大学、2007年10月20日
- ⑩ 笹川秀夫、植民地期のカンボジアにおける対仏教政策と仏教界の反応、東南アジア学会関西例会 (京都大学東南アジア研究所主催「次世代の地域研究」研究会との共催)、於京都大学東南アジア研究所、2007年7月21日
- ⑪ SASAGAWA Hideo, “Popular Culture in Southeast Asia,” RCAPS Seminar “Aiming to be the Frontier of Undergraduate Education on Southeast Asian Studies: Possibilities and Challenges for APU”、於立命館アジア太平洋大学、2007年6月20日
- ⑫ 笹川秀夫、タイとカンボジアのポピュラー音楽にみるグローバル化と反グローバル化、カルチュラル・スタディーズ・フォーラム5月例会「グローバル化時代のワールド・ミュージックとメディア」、於武蔵大学、2007年5月26日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹川 秀夫 (SASAGAWA HIDEO)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：10435175